

<陳述書（抜粋）>

ある日、思いがけない事件がわが家を襲いました。私が小学一年生の時に、父がくも膜下出血で倒れてしまったのです。最悪そのまま亡くなることもある非常に危険な脳の病気です。一家の大黒柱が倒れたということは経済的にも大変なことでしたが、それ以上に大変なことは父がほぼ植物人間の状態になったことです。父の回復を祈りながら、今後私たちの家はどうなるのだろうか、と胸が痛くなるような不安でいっぱいだったことを思い出します。そんな時も教会員は父の病状の回復のために祈祷し、母を激励し、私たちの世話をしてくれました。今考えても本当に感謝しかありません。その後、父は一時危ないときもありましたが、意識を取り戻しました。といっても、病後の影響で知的障害が残りました。リハビリの生活こそ大変困難で、母は自分の時間がないほど介護と育児に追われることになりました。疲れたとき、寂しく悲しかったときもあったと思います。しかし、私の母はいつも私たちに変わずに笑顔で明るく接してくれました。私はそんな母に尊敬の思いを抱くと同時に、自分ならば到底そんな生活は我慢できないと思っていました。

ある時、母になぜそんな風に父の介護ができるのか聞きました。母だって介護と育児だけの生活は嫌ではないか、無償の愛で父に尽くす母の姿は、いくら家庭連合の信者といっても、限界があるだろうと感じていました。しかし、その答えは「お父さんは神様が選んでくれた大切な人だから」というものでした。母の言葉は私に衝撃を与えました。「本当に母親は神様の愛を信じているのだ。病気になっても父を神様が選んでくれた人として愛しているのだ」と。私は純粋に生きるそんな母の姿を見て、自分の姿勢を反省すると同時に母を無条件に尊敬するようになりました。そして、母の学んでいる家庭連合の教えと考えに自然に関心を持つようになりました。

大学生になり、本格的に母の信仰を支えている家庭連合の教理である「統一原理」を自分から学び始めました。あきらめずに祈っていると、ある日から、神様がそんな私でも愛してくださっていることを感じるできるようになりました。今では、私も自らの意思で合同祝福結婚を受け、理想の家庭を築いていきたいと思っています。二世として生まれてきて本当に良かったと心の底から思っています。

今、メディアには私と同じ二世の立場で苦労された方が出てきています。同じ二世として胸が痛くなると同時に、そうではない二世もたくさんいると言いたくなります。あたかもそれがすべての信者の家庭で起こっている、二世信者は信仰を強要されて不幸である、と言わんばかりの報道は、あまりに偏っていると感じます。私たちのような二世もたくさんいることを知ってほしいと思います。

家庭連合をめぐる裁判について非公開で行われていて、非常に心苦しく感じています。文部省が提出した資料に捏造疑惑があったと報道されましたが、裁判で実際に語られていること、行われていることを自分の目や耳で確認することもできないことに激しく憤りを感じています。真偽を確かめるためにも利害関係人として参加させていただくことを強く願います。